＜研究論文＞

# 世界史教育における「国家」の取り扱いについて
## —19世紀フランスを事例に—

高　橋　健　司*

## 1．はじめに

現在，「国家」を巡る活発な論議が交わされ，それが社会科教育，歴史教育へも波及し始めている。しかし，教室は「国家」を称讃したり弾劾したりする場ではない。教師が「国家の栄光を称える」とか，反対に「国家による暴虐を暴く」といった姿勢で授業に臨んではならないと考える。では高等学校の世界史の授業において，どのように「国家」を取り上げることが可能であろうか。

従来の歴史教育では，「国家」を既存のものとして取り扱ってきた観があるが，ベネディクト・アンダーソンが国民国家における「国民」を「想像の共同体」と唱えて以降[1]，政治学や社会学，歴史学の分野では，それまで自明視されてきた「国家」や「国民」といった概念自体が，ある特定の時代や社会を背景として歴史的・社会的に構築されたものであるとする，社会構築（構成）主義的な見方が盛んになっている。それゆえ歴史教育においても，近代に誕生した国民国家を自然発生的に捉えるのではなく，国民国家が構築された歴史的なプロセスに焦点を当てて学習する授業が構想できる。

そこで本稿では，事例として19世紀フランスを取り上げ，国民国家形成期の社会史を学習する授業と教材を開発して提示し，それをもとに世界史教育における国民国家の取り扱いについて考察する[2]。

## 2．授業開発の視点
### —19世紀フランスにおける記念・顕彰行為に注目して—

授業開発にあたり，近年のセンター試験世界史における国民国家の取り上げ方に注目したい。まず2004年実施の世界史問題では，「近代ナショナリズムは，18世紀末から19世紀にかけてヨーロッパと南北アメリカ大陸に現れて以降，多くの場合，ネーション・ステート（国民国家）の建設と強化を志向してきた。その際，国民国家を人々に意識させるために，シンボルや儀礼が盛んに用いられた。そうしたシンボルや儀礼の例として，国民国家を象徴する旗や歌，彫像など，また，ネーションの歴史のなかで重要とみなされた，建国や革命，戦争のような事件を記念する記念碑や祭典がある」と紹介され，その具体例として1878年に設置されたフランスの「共和国像」が取り上げられている[3]。

次に2002年実施の世界史問題でも，祭りや儀式が政治的な意味を持つ例として同じくフランスが挙げられて，「政治体制が目まぐるしく変化した19世紀にも，ナポレオン1世の生誕を記念した第二帝政期の祭典，フランス革命の諸事件を記念した第三共和政期の祭典などが催され」，「過去の偉大な人物や出来事にかかわる記憶が喚起された。同じ過去を共有することで，人々の間に一体感や政治体制への共感が生まれると期待されていたのである」と説明されている[4]。

このようにセンター試験では既に，国民国家を記念碑や祭典によって捉えようとする姿勢が見られ，国家的規模で繰り広げられた記念行為の意味が問われている。そして，繰り返し注目が集まるフランスは，19世紀以降「過去の偉大な人物や出来事」に対する記念・顕彰行為を活発に展開し，それは「国民国家を人々に意識させ」，「同じ過去を共有することで，人々の間に一体感や政治体制への共感」を得るため，換言すれば「国民」意識を喚起しようとするものであった。また，そ

＊朝日大学

れは単に理念的な国家統合にとどまらず，度重なる対外戦争を背景に，文字通り「国家」のために戦うことのできる「国民」の育成を目指したものであったと言える。

これに関して，フランスの歴史家ピエール・ノラによれば，かつてフランス社会において記念・顕彰行為（コメモラシオン）は，「国民史の濃縮した表現」，「めったにない荘厳なひととき」，「常に困難に見舞われつつも自己の本源へと集団的に回帰しようとする方式」を意味し，「歴史に支えられた国民」はコメモラシオンに自己のアイデンティティを託していたとする[5]。

そして，この「国民史」に不可欠な歴史的人物とされ，社会から活発に記念・顕彰されたのが「英雄」ナポレオンである。ナポレオンを巡っては，フランス革命後の社会において，民衆から知識人まで幅広い層がナポレオンを英雄視して崇拝した，ボナパルティズムという現象が生じ，それはナポレオン3世による第二帝政を実現化させるなど現実の政治的な変革の原動力となった。まさにナポレオンは「国家」の「栄光」を体現したシンボルであったと言えよう。

しかし，この「栄光のナポレオン」像を，単純に「史実」と見なすことはできない。ボナパルティズムをナポレオン伝説との関係から考察した西川長夫によれば，ナポレオン伝説の特徴として，①近代社会の誕生にかかわる伝説であり，フランス大革命と帝政期の国民的な体験がナポレオンの伝説として結晶した，②無名の大衆によって語り継がれ自然発生的に形成された側面と，新聞・雑誌・書物・演劇・絵画・流行歌等，近代的なメディアを通じて多分に人為的に形成された側面を併せ持つ，③生前のナポレオン自身によって加筆修正された伝説という極めて特殊な性格を持つ，の三点を挙げ，「農民も労働者も政治家や知識人も，それぞれの仕方においてではあるが，ヨーロッパをおおったこの巨大な幻想を共有」し，「ナポレオン伝説は政治的な大情況を動かす現実的な力となりえた」と分析する[6]。

また，杉本淑彦は，ナポレオン伝説を民衆の心性のなかで転変するナポレオンの記憶と捉え直し，「記憶の歴史学」の立場から，ナポレオンに対する記憶のありよう（忘却，隠蔽，すり替え）が，経済や政治と絡まりながら歴史を動かしてきたとする，フランス社会史研究を行っている[7]。

このように，19世紀のフランス社会においては，ナポレオンの記憶が「国民」意識の拠り所＝ナショナル・アイデンティティとされ，各政権は活発にナポレオンを顕彰して体制の維持に利用した。それゆえ，記念・顕彰行為によって表象されるナポレオンの記憶に注目すれば，国民国家形成期の社会におけるナショナリズムを捉えることが可能となる。では実際に世界史の授業において，どのようにナポレオンの記憶を取り上げることができるのであろうか。次に具体的な教材開発を提示する。

## 3．ナポレオンの記憶の教材化
### －ヴァンドーム広場の記念柱を手掛かりとして－

ここでは，一見捉えどころのない記憶を可視的に捉えるために，「記憶のかたち」に注目したい。「記憶のかたち」とは，歴史的出来事や人物に対する記念・顕彰行為によって生み出された銅像や記念碑などを指し，ナポレオンの「記憶のかたち」としては，1810年，ナポレオンがアウステルリッツの戦いでの戦勝を記念してパリのヴァンドーム広場に建てた，頂上にナポレオンの銅像を据えた円柱（記念柱）が挙げられる。

そして，この記念柱は，19世紀の僅か70年足らずの間に，(1) 記念柱の建立，(2) ナポレオン像の撤去，(3) ナポレオン像の復活，(4) ナポレオン像の交代，(5) 記念柱の破壊，(6) 記念柱の再建と，フランスの政治体制の大きな変動と連動して目まぐるしく変容を遂げている。

それはまさにヴァンドーム広場の記念柱が，フランス社会におけるボナパルティズム＝ナショナリズムを映し出す鏡であり，その変容はナポレ

オンの政治的意味付けの変化を表していると言えよう。そこで記念柱の変遷に従って，19世紀を6期に分け，記念柱を手掛かりとして各時期の社会状況について見たい。

(1) 記念柱の建立（第一帝政期）

パリのヴァンドーム広場に建立された記念柱は，1805年のアウステルリッツの戦いでフランスが捕獲した1200門の大砲を鋳直して造られ，皇帝ナポレオンの41歳の誕生日である1810年8月15日に，建立式典が挙行された。記念柱の頂上には，頭に月桂冠をかぶり，左手には「勝利の女神」像，右手には剣を持ち，古代ローマ風の衣装をまとったナポレオン像が設置され，柱身は螺旋状に，アウステルリッツの戦いにおける425個の戦勝シーンを刻んだレリーフによって覆われた。（図1参照）

美術史研究の鈴木杜幾子によれば，記念柱の手本となったのはローマのトラヤヌス帝の円柱であり，トラヤヌス帝の円柱とは「皇帝のダキア戦争の勝利を記念して二世紀初頭に建設された大理石の柱で，柱身の周囲にダキア戦争のエピソードの浮き彫りが帯状に巡らされている。頂きにはかつては皇帝の像があったが，16世紀に聖ペテロ像に取り替えられた」もので，イタリアを支配下に置いたナポレオンは，この円柱の立つトラヤヌス帝の広場の発掘調査を行なって，古代ローマの代表的なモニュメントを模倣し，ヴァンドーム広場の記念柱やカルーゼルの凱旋門を次々と建造するなど，パリを改造して「新しいローマ」の建設を目指したとされ[8]，皇帝ナポレオンは自らをローマ皇帝に模してその姿を銅像に刻み，記念柱の頂上に設置したと言える。

(2) ナポレオン像の撤去（復古王政期）

しかし，1814年4月，ナポレオンの退位によって誕生した復古王政は，記念柱の頂上にあったナポレオン像を撤去してブルボン王朝のアンリ4世の騎馬像に改鋳し，記念柱の頂上にはブルボン家のユリの紋章入りの白旗を据えた。その一方で柱自体は破壊を免れることができたが，それは復古王政が記念柱を「ナポレオンの軍事栄光」から「フランスの軍事栄光」を記念するものへと読み替え，国威発揚のモニュメントとして存続させる意図があったからである。

この背景には，民衆のナポレオンに対する怒りや憎しみが存在し，例えば1814年にパリで流布した「人類をむさぼり喰らう鬼」と題された風刺画では，多くの若者を徴兵し死に追いやった殺人鬼としてナポレオンが描かれている。（図2参照）

また，当時13歳の少年であったヴィクトル・ユゴーも，復古王政を称えて1815年12月に「国王ばんざい！フランスばんざい！」と題する，次の詩を作っている[9]。

> コルシカは倒れ伏し，ヨーロッパはルイの即位を宣言し，不実な殺人ワシが，ユリの花の前に墜落する。国王ばんざい，国王のおかげでわたしたちは幸せになれる。国王はわたしたちに豊かさをもたらす。オーイみんな，心をこめて何度もくりかえそうよ，国王ばんざい，フランスばんざい。

さらにユゴーは，記念柱から撤去されたナポレオン像を改鋳して造ったアンリ4世の騎馬像に触れて，次の「アンリ4世像の再建」（1819年）という詩を作った[10]。

> 若者たちよ，この柵のまわりで輪になって踊れ，楽しいステップをともに踏み，幸せな歌声をともに響かせろ。善良さが顔にあふれんばかりのアンリが，君たちの喜びように心動かされ，祝福をくださるだろうから。うぬぼれのモニュメントの上で，そびえ立っていた暴君は，あまたの年月こそかかりはしたが，抑圧されていた臣民の手でとどめを刺され，その近くにあって，ああ，なんて美しいのだろうこの青銅は！

このようにナポレオン像の撤去は，ナポレオンを「不実な殺人ワシ」，「暴君」と見なす当時のフランスの社会状況を映し出している。

(3) ナポレオン像の復活（七月王政期）

1821年5月5日，ナポレオンは囚われの身のままセント・ヘレナ島で死亡した。しかし，ナポレオンの記憶は，彼の死後，劇的な変容を遂げていく。その契機となったのが，1823年末にパリ

で出版された『セント・ヘレナ回想録』である。これはセント・ヘレナ島でナポレオンに侍従として仕えたラス・カーズが著した，ナポレオンの「口述筆記」とされるもので，フランスの歴史家ジャン・チュラールによれば，「その本によって暴君のイメージが修正された。『十字架の上で死ななかったならば，キリストは神とはなっていないであろう』と，ナポレオンは言ったらしい。迫害されて死んだことで，ナポレオンは浄化されたのである。人びとはナポレオンを憐れみ，同情し，彼のために涙を流した」と述べ，「セント＝ヘレナに囚われたおかげでナポレオンは，徴兵の乱用で離反した民衆から，同情と賞讃を取り戻した」と分析する[11]。

この結果，生前のナポレオン自身が望んだ「栄光のナポレオン」像が決定的なものとなり，それはフランスが繁栄しヨーロッパを支配していた時代をフランス人に喚起させ，ナポレオンを「フランス革命の防人」として位置付け，また「フランス革命にナポレオンを一体化させる」ことに成功して，そのイメージが多くの人々に受容された[12]。

例えばフランス・ロマン主義の作家ジェラール・ド・ネルヴァルが，1826年に発表した次の「流刑者の死」という詩の中で，ナポレオン像が不在のままの記念柱が取り上げられ，「英雄」ナポレオンが懐古され称讃されている[13]。（図3参照）

> 彼は戦勝時と同様に平和時にも偉大だった。ああ，フランス人よ，あの栄光の円柱を凝視せよ，その誇らしげな青銅にはおまえたちの戦闘が刻まれている。立法者に栄光あれ，彼は犯罪をうち倒し，無実に対しては厳格な復讐者を示す。彼に鼓舞され力を取り戻した裁きの神テミスが，英雄に聖なる輝きをあたえる。

このような時代の変化の中で，復古王政期に記念柱を「うぬぼれのモニュメント」と呼んだユゴーもまた，ナポレオンに対する見方を大きく変え，1827年に「ヴァンドーム広場の円柱に」と題する次の詩を発表し，当時のフランス社会におけるボナパルティズムの高揚を，ユゴー自身が体現して見せている[14]。

> ああ，復讐のモニュメントよ！忘れがたい勝利の想い出よ！不動の柱脚の上で螺旋に渦巻く青銅よ，天空に，おまえの栄光とおまえの死滅が記されているようだ。巨大な手がなした事跡のなかで，ただ一つ倒れずにいるもの，―それは，勝利をとどめる，巨人の建造物のこの名残だけ！大帝国と大軍隊の名残であっても，円柱から，盛名がはっきりと聞こえてくる。わたしは，おまえを愛する。異邦人も，おまえを見上げて畏れる。わたしは，勝利で刻まれたおまえの英雄たちを，栄光につつまれ，おまえのまわりでひしめく，この亡霊たちを，すべて愛する。

そして，ナポレオン時代の郷愁の高まりと共に，復古王政に対する糾弾の声が強まる中，1830年7月，パリの民衆が蜂起して七月革命がおこり，自由主義者のオルレアン家のルイ・フィリップが新しい国王として迎えられた。

新国王となったルイ・フィリップは，このような民衆の間のナポレオン人気におもねる形で，1831年4月に記念柱のナポレオン像の再建の勅令を出し，1833年7月28日の革命3周年記念日に，記念柱の頂上にブロンズのナポレオン像が再建されて復活した。ただし，その姿は古代ローマ皇帝を模した初代の像とは異なり，軍服の上にフロックコートを羽織り，右手には望遠鏡を持ち，左手はチョッキの打ち合わせに差し込んだもので，足元には砲丸が置かれ，立っているのが戦場であることを示していた。（図4参照）

これは兵士たちの戦闘で自ら砲弾に身をさらして戦う「小伍長」（兵士によってつけられた愛称）の姿であった。その理由として，鈴木杜幾子によれば，かつての「皇帝」姿のナポレオン像では，王政を正面から否定する意味合いをもってしまうために，政府が主催した制作者決定のコンペティションでは軍服姿の像という条件がつけられ，それは柱身の浮き彫りが「大陸軍」の兵士たちをあらわしているのに調和するという大義名分にも増して，「フランスの栄光の時代を人々に思い起こさせる力をもち，特に『小伍長』は王政復古期の反体制精神の象徴として，オルレアン体

制にとっては好ましいイメージであった」からであり，ルイ・フィリップ王と側近の意図は，「王政復古期の反体制の象徴であった『小伍長』を公的美術に取り入れることによって，共和派と結ぶボナパルティスト勢力を懐柔しようとするものであった」とする[15]。

さらに，銅像の復活から3年後の1836年7月29日，七月王政はエトワール広場にナポレオンを顕彰する凱旋門を完成させ，1840年には遂にセント・ヘレナ島に埋葬されていたナポレオンの遺骸のパリ帰還を実現させた。当時の内相レミュザは議会において，次のように遺骸の帰還の意義について演説している[16]。

> ナポレオンは皇帝でもあり国王でもありました。わが国の正統な君主でありました。しかしナポレオンに対しては，国王の普通の墓所をあてがうというわけにはまいりません。祖国の兵士が安らぎをうる場所，祖国を守るべく将来召集されるであろう人びとが訪れてつねに鼓舞される場所。そういう場所でナポレオンが国を統治し軍隊を指揮しつづけている，ということが必要なのであります。統治と指揮のための剣が墓上に置かれるでありましょう。今後はフランスが，フランスのみが，永遠に遺るナポレオンのすべてのものを占有することになるでありましょう。ナポレオンの墓所は，彼の記憶とおなじように，彼の国のみに帰属することになるでありましょう。と申しますのも，1830年に誕生した王政は，フランスが誇るすべての主権者の唯一正統な継承者だからであります。民衆の英雄の像と墓を，なんの危惧もなしに建立し崇拝しうるものがあるとすれば，それはおそらく，あらゆる勢力の統合役を，フランス革命の願望の調停役を，はじめてはたしたこの1830年王政なのであります。

この中ではフランス革命とナポレオンの記憶の一体化が生じた後に，「フランス革命の防人」であるナポレオンを顕彰することで，七月王政をフランス革命の正統な継承者に位置付けようとする意図が読み取れる。

それは経済不況や深刻化する失業問題に対する民衆の不満の高まりを，示威行事によってそらすと同時に，七月王政が「フランス革命との親子関係」を主張しようとしたものであったと言えよう[17]。

### (4) ナポレオン像の交代（第二帝政期）

しかし，七月王政の思惑とは裏腹に，ナポレオンの遺骸の帰還によってボナパルティズムは高揚の一途を辿り，やがてそれは七月王政を批判する方向へと転化した。それを裏付けるのが1840年末に印刷された風刺画「ナポレオン像と対をなす銅像計画」であり，そこにはルイ・フィリップ王が，彼自身が再建したヴァンドーム広場の記念柱のナポレオン像と正反対に描かれ（軍服→平服，剣→雨傘，砲弾→人気取りの勲章の山），政治と社会に不満を抱く民衆から，弱腰の姿勢が嘲笑されている。（図5参照）

まさに，このような状況の中で，後のナポレオン3世となるルイ・ナポレオンが登場した。ルイ・ナポレオンは，次の1839－40年に著した『ナポレオン的観念』の中で，ナポレオン戦争の惨禍を隠蔽しながら，「自由と平等の擁護者」であり「社会改革の実現者」であるナポレオン1世と自らを同一視させることを目指している[18]。

> 道義にかない，かつ進歩的で文明的な思想は，政情不安定な社会のなかからこそ生まれてくる。つまり，ナポレオン的観念は，兜をかぶり火炎につつまれながらミネルヴァがジュピターの頭から生まれ出たように，フランス革命のなかから生まれてきたのだ。（中略）ナポレオン的観念は，貧しき家にこそ目を向けるものである。人権について無益な宣言をただ振りかざすのではなく，貧しき者の渇きと飢えを癒すために，必要な方策を携えて彼らの家へ赴く。これがナポレオン的観念なのだ。（中略）帝政期のさまざまな戦争は，ナイル河の氾濫のようなものだった。大河の水がエジプトの田畑を覆いつくしているとき，人が思い描くのは惨禍ばかりだろう。しかし，水が退くや，たちまちその跡に，豊沃と豊穣がもたらされるのだ。

このようにして，1848年の二月革命後に誕生した第二共和政下で，普通選挙によって実施された大統領選にルイ・ナポレオンは出馬し，ヴァンドーム広場の記念柱上のナポレオン像を投票箱に見立てた選挙用ポスターを作成するなど，民衆のナポレオン人気に訴えることで世論を味方に

つけ，選挙に圧勝して大統領となった。(図6参照)

しかし，その3年後の1851年12月2日（ナポレオン1世の戴冠記念日）には，クーデタを決行し，翌1852年の国民投票で支持を得て，同年12月2日ナポレオン3世と称して第二帝政を開始した。そして皇帝となったナポレオン3世は，1863年11月5日，記念柱の頂上の軍服姿のナポレオン像を撤去し，第一帝政期のローマ皇帝姿のナポレオン像を模した新たな像に替え，盛大な式典を挙行したのである。

かつてナポレオン1世を顕彰した多数の詩を発表し，ルイ・ナポレオンの大統領就任に貢献したユゴーは，クーデタに反対してフランス国外での亡命生活を余儀なくされたが，1852年，第二帝政の開始に対し，怒りを込めて『懲罰詩集』を出版した。この中でユゴーは，自らのボナパルティスト詩人としての半生に対する悔恨と，民衆のボナパルティズムの高揚に対する危惧から，「贖罪」と題する次の詩を発表している[19]。

> 皇帝は死んで，破壊された帝国の上に倒れた。ナポレオンは，柳の木の下で永遠の眠りについた。すると，全世界の諸国民は，独裁者ナポレオンを忘れて，英雄ナポレオンに夢中になった。詩人たちは，死刑を執行した諸国の王たちの額に烙印を押し，瞑想にふけりながら，この敗れた栄光の人を慰めた。そして，ぽつんとさびしく立っているヴァンドーム広場の記念柱に，人々は皇帝の像を戻した。目を上げると，パリの町に，静かにあたりを見下ろしながら，皇帝の像が立っているのが見えた。ただひとり，昼は青空を，夜は星空を背にして。諸国の偉人廟よ，人々は彼の名をおまえたちの柱に刻んだ！人々がいま見ているのは，あの時代の明るい面ばかり。人々がいま思い出すのは，栄光に輝く日ばかり。あの不思議な男は歴史を陶酔させたと言えるのだ。冷静な目をもつ公正さも，あの皇帝の栄光のもとに消えうせた。

ユゴー自身，ナポレオンの記憶に翻弄された一人と言えるが，当時のフランス国内の熱狂的なボナパルティズムに対して，ユゴーは国外から醒めた眼で警鐘を鳴らしたにもかかわらず，記念柱上のローマ皇帝姿のナポレオン1世と自らを重ね合わせたナポレオン3世は民衆からの支持を失うことなく，第二帝政は既成事実化された。

### (5) 記念柱の破壊（パリ・コミューン期）

そして1870年，ナポレオン3世はフランス＝プロイセン戦争に敗北し，自らプロイセン軍の捕虜となって第二帝政が崩壊し，新たに誕生したパリ・コミューン下で，1871年5月16日，ヴァンドーム広場の記念柱は，頂上のナポレオン像と共に引き倒され，遂に破壊された。(図7参照) その際，パリ・コミューンは以下のような布告を出している[20]。

> パリ・コミューンは，ヴァンドーム広場の帝国円柱が，野蛮の記念碑であり，暴力と虚栄との象徴であり，軍国主義の肯定であり，国際法の否定であり，敗者に対する勝者の永遠の凌辱であり，フランス共和国の三大原則の一なる友愛に対する永久の侵害であることに鑑み，左の如く布告す。　一箇条　ヴァンドーム広場の円柱は，これを破壊すべし。
>
> 1871年4月12日，パリ　パリ・コミューン

ナポレオン3世は，ナポレオン1世の記憶を政治的に利用し，自らをナポレオン1世と同一視させてフランス革命の正統な後継者としての立場を強調したが，プロイセンに敗北して捕虜となるという失墜によって，ナポレオン1世の「栄光のナポレオン」像，「フランス革命の防人」像もまた崩壊し，反対に復古王政下のナポレオンの暗黒伝説が呼び覚まされ，ヴァンドーム広場の記念柱が，「野蛮の記念碑」，「暴力と虚栄との象徴」，「軍国主義の肯定」として打ち倒されたと言えよう。

### (6) 記念柱の再建（第三共和政期）

しかし，ナポレオンの記憶は封印されることなく，再度復活して20世紀の歴史，そして現在まで影響を及ぼし続けている。ヴァンドーム広場の記念柱は，破壊から僅か4年後の1875年，第一帝政期の姿で再建された。(図8参照) それは，フランス＝プロイセン戦争の敗北によって，アルザス・ロレーヌ地方をドイツに奪われるという「屈辱」に対し，「対独復讐熱の喚起」が求められ，かつてイエナの戦いでプロイセンを撃ち破ったナポレオンとその軍隊の「栄光」の記憶が，必要とされたからである。

例えば対独復讐論者の最右翼として活動した，ロレーヌ出身の政治家・作家のモーリス・バレスは，1898年に若者の間でベストセラーとなった小説『根こぎにされた人びと』を著し，この中で主人公のロレーヌ地方出身の若者に，ナポレオンの命日にその遺骸が眠るアンヴァリッド館を訪ねさせ，次のように語らせている[21]。

> 僕たちの世代は，まだ雑然とした集団にすぎないけれども，そのなかに，指導者が潜み，リーダーが，明日の指揮官がいるんだ。そんな選良として生まれついた運命なのだと気づかせてくれる，何かしるしのようなものがあるのだろう。でも，しるしを探すなんて，もうやめにしよう。僕たちこそがその何かを内に持っている，と信じようではないか。僕たちが指揮官なんだよ，きっと！ナポレオンの墓に，エネルギーの師の墓に，一人前の男であることを誓おう！

先に七月王政下の内相レミュザが「祖国の兵士が安らぎをうる場所，祖国を守るべく将来召集されるであろう人びとが訪れてつねに鼓舞される場所。そういう場所でナポレオンが国を統治し軍隊を指揮しつづけている」と演説したように，まさにその場所でナポレオンは故郷をドイツによって奪われた人びとに復讐のエネルギーを与える役割を果たし，ヴァンドーム広場の記念柱上のナポレオン像もまた，「フランスの守護神」として再度の復活を果たして，多くの若者にプロイセンに対する戦勝の記憶を喚起させ，「国家」のために戦う「国民」を育成することに貢献した。

しかし，それは同時に，戦争がもたらす「野蛮」や「暴力」の記憶を忘却へと押しやり，その結果フランスは新たに145万人にも上る戦死者を生み出した第一次世界大戦へと突き進んで行った，と言えるのではないだろうか。

## 4. 単元「ナポレオンの記憶と19世紀のフランス」の開発

以上の教材を用いた世界史の授業構想が，単元「ナポレオンの記憶と19世紀のフランス」である。本単元で取り上げる内容は，高等学校学習指導要領の世界史Bの「内容」の「(4) 諸地域世界の結合と変容」の「ウ　ヨーロッパ・アメリカの変革と国民形成」に位置付け，パリのヴァンドーム広場に建つ記念柱の変容を手掛かりとして，ナポレオンの記憶の表象に注目し，国民国家形成期におけるフランス社会の変動とナショナリズムの高揚について理解すると共に，国民国家が繰り広げた記念・顕彰行為の意味を考察し，近現代世界に対する多角的な見方を養うことを単元の目標とする。

また，本単元の配当時間は4時間とし，以下のような構成とする。

第1次：＜導入＞ナポレオンとフランス近代美術（1時間）

第2次：ヴァンドーム広場の記念柱とフランス社会の変動（2時間）

第3次：＜発展学習＞「記憶のかたち」と歴史表象（1時間）

このうち，第2次を資料1として提示する[22]。

## 5. おわりに

開発した世界史の単元「ナポレオンの記憶と19世紀のフランス」の中では，単に国民国家における「歴史に支えられた国民」を問うだけではなく，さらにナショナル・アイデンティティとされる「歴史」とは何かを問うた。そこで問題とされる「歴史」とは，後世の社会から想起される歴史的記憶・集合的記憶の表象，すなわち歴史表象であり，この歴史表象の意味や問題点を世界史の授業を通して考えることが，国民国家を捉える上で重要ではないだろうか。

かつて20世紀前半にフランスの社会学者モーリス・アルヴァックスは集合的記憶論を唱え[23]，この集合的記憶論をアメリカの歴史学者パトリック・ハットンが再評価して，「集合的記憶は現在の目的に見合うようにたえず改定される」点に注目し，「集合的記憶が持続する力は，それを指示する集団の社会的力に左右される」ゆえに，「社会的表象の現象学的研究は，社会史の重要な

文化的見通しを与えてくれる」と指摘する[24]。

また，高等学校世界史の教育現場からも安達一紀や[25]，新木武志によって[26]，歴史表象の政治性・現在性を読み解くことで，記念・顕彰行為を行なった社会について学習する授業の重要性が指摘されており，それは世界史教育の改善を目指して原田智仁が唱える「歴史を読み解く力」=「歴史リテラシー」の育成に繋がる[27]。

最後に日本を顧みると，フランスと同様に日清・日露の戦勝の記憶が国家的規模で盛んに記念・顕彰され，その「栄光」の記憶は「一等国」となった「国家」を「国民」に強く喚起させて，次なる戦争へと駆り立てていった[28]。それゆえ，世界史の授業を通して国民国家が拠り所とする「歴史」を再考し，「国民」や「国家」を相対的に捉える視点を養うことが，これからの世界史教育に求められる課題ではないだろうか。

---

**註**

(1) ベネディクト・アンダーソン，白石さや・白石隆訳『増補　想像の共同体―ナショナリズムの起源と流行』NTT 出版，1997 年。

(2) 本稿では触れなかった民族国家の取り扱いについては，拙稿「国民・民族って?―難題を変換するプロの技」(『社会科教育』2007 年 7 月号，明治図書）を参照されたい。

(3) センター試験問題「世界史 A」2004 年実施，4 － 6 頁，同「世界史 B」2004 年実施，32 － 34 頁。

(4) センター試験問題「世界史 B」2002 年実施，52 頁。

(5) ピエール・ノラ「コメモラシオンの時代」ピエール・ノラ編，谷川稔監訳『記憶の場　フランス国民意識の文化＝社会史　第 3 巻』岩波書店，2003 年，454 頁，469 頁。

(6) 西川長夫『フランスの近代とボナパルティズム』岩波書店，1984 年，270 頁。

(7) 杉本淑彦『ナポレオン伝説とパリ　記憶史への挑戦』山川出版，2002 年。

(8) 鈴木杜幾子『ナポレオン伝説の形成　フランス 19 世紀美術のもう一つの顔』筑摩書房，1994 年，162 － 163 頁。

(9) 杉本，前掲書，92 － 93 頁。

(10) 杉本，前掲書，93 － 94 頁。

(11) ジャン・チュラール「遺骸の帰還　ナポレオン伝説とアンヴァリッド」ノラ編，前掲書，112 頁。

(12) チュラール，前掲論文，112 － 115 頁。

(13) 杉本，前掲書，98 頁。

(14) 杉本，前掲書，96 － 97 頁。

(15) 鈴木，前掲書，164 － 166 頁。

(16) 杉本，前掲書，124 － 125 頁。

(17) チュラール，前掲論文，117 － 118 頁。

(18) 杉本，前掲書，163 － 164 頁。

(19) ヴィクトル・ユゴー，辻昶他訳『ヴィクトル・ユゴー文学館　第一巻　詩集』潮出版社，2000 年，96 － 97 頁。

(20) アメデ・ヂュノア編「パリ・コミューン資料集」木下半治訳・編『パリ・コミューン』春陽堂，1931 年，209 頁。

(21) チュラール，前掲論文，135 頁。

(22) 第 1 次と第 3 次については，拙稿「歴史教育における記憶の取り扱いについて―ヴァンドーム広場の記念柱の教材化を事例に―」(『朝日大学教職課程センター研究報告』第 13 号，2005 年）を参照されたい。

(23) M. アルヴァックス，小関藤一郎訳『集合的記憶』行路社，1989 年。

(24) パトリック・H・ハットン，村山敏勝訳「現代史学における記憶の位置づけ」『現代思想』1995 年 1 月号，青土社，149 － 150 頁。

(25) 安達一紀『人が歴史とかかわる力　歴史教育を再考する』教育資料出版会，2000 年。

(26) 新木武志「歴史教育における表象分析の意義と課題－トラファルガー広場のモニュメント空間分析を中心に－」『史潮』新 46 号，

1999年，58 － 71頁。

(27) 原田智仁「世界史教育の改善　歴史リテラシーの可能性（7）銅像・記念碑の読み解き」文部科学省教育課程科編『月刊　中等教育資料』平成16年4月号，42 － 43頁。

(28) 拙稿「歴史教育における記憶の取り扱いについて（2）―日露戦争の表象を巡って―」（『朝日大学教職課程センター研究報告』第14号，2006年）を参照されたい。

図版出典

図1～図7　杉本淑彦『ナポレオン伝説とパリ記憶史への挑戦』山川出版，2002年。

図8　『CD － ROM版写真図録　19世紀ヨーロッパの残映（1）パリとその周辺』丸善。

資料１　単元「ナポレオンの記憶と19世紀のフランス」

第２次「ヴァンドーム広場の記念柱とフランス社会の変動」学習指導計画

| 時 | 学　習　活　動 | 指導上の留意点・資料 |
|---|---|---|
| 1時間目 | パリの絵地図を見ながら，ナポレオンが古代ローマの美術様式を模倣した建造物やモニュメントを建造し，パリを帝都にふさわしい「新しいローマ」に改造しようとしたことを知り，ヴァンドーム広場の記念柱に注目する。 | パリの絵地図の提示<br><br>写真パネル「ヴァンドーム広場の記念柱」の提示 |
| | 記念柱上のナポレオン像の姿を見て，それが何を表し，どのような意図を持って製作されたものであったかを考える。<br><br>ナポレオンの「百日天下」後，誕生したブルボン復古王政下での記念柱の姿を知る。 | パネル「記念柱上の初代ナポレオン像の模写」の提示 |
| | ヴィクトル・ユゴーの作った詩を読み，また当時の風刺画を見て，ナポレオンが「殺人ワシ」「人喰い鬼」として人々に想起されていることに気付く。<br><br>ナポレオンの死後出版された『セント・ヘレナ回想録』により，ナポレオンが再評価されるようになったことを知る。 | プリント「ユゴー作『国王ばんざい！フランスばんざい！』・『アンリ４世像の再建』」の配布<br>ユゴーが詩の中でナポレオンに対し「うぬぼれのモニュメントの上で，そびえ立っていた暴君」と評していることに注目させる。 |
| | ジェラール・ド・ネルヴァルの詩を読み，ナポレオン像が撤去されたヴァンドーム広場の記念柱から，「英雄」ナポレオンが想起されていることに気付く。 | プリント「ネルヴァル作『流刑者の死』」の配布 |
| | ユゴーの作った詩を読み，彼のナポレオンに対する評価が，どのように変化したかを調べ，七月王政下で，ナポレオン崇拝（ボナパルティズム）が高まったことを理解する。<br><br>七月王政がヴァンドーム広場の記念柱のナポレオン像を復活させたことを知る。 | プリント「ユゴー作『ヴァンドーム広場の円柱に』」の配布<br>ユゴーが詩の中でナポレオンとその軍隊を，「巨人」「英雄たち」と賞賛するようになったことに注目させる。 |
| | 新たに製作された記念柱上のナポレオン像を見て，何ゆえ皇帝の姿ではなく「小伍長」姿に変身したのかを話し合い，その意味について考える。 | 写真パネル「記念柱上の二代目ナポレオン像」の提示<br>七月王政が民衆の間のナポレオン人気を政治的に利用しようとした一方で，王政批判に繋がる要素を意図的に排除したことに注意する。 |
| | 七月王政によってナポレオンの顕彰が一層活発となり，エトワール広場の凱旋門の建設や，ナポレオンの遺骸のパリへの帰還が実現されたことを知る。 | 写真パネル「エトワール広場の凱旋門」の提示 |
| | ナポレオンの遺骸の帰還の意義を議会で演説した内相レミュザの文章を読み，その政治的意図に気付く。 | プリント「レミュザの演説」の配布<br>七月王政をフランス革命の正統な継承者に位置付けようとする意図が読み取れるよう配慮する。 |

| 時 | 学　習　活　動 | 指導上の留意点・資料 |
|---|---|---|
| 2時間目 | ルイ・フィリップ王に対する風刺画を見て，ボナパルティズムが七月王政を批判する方向に転化したことに気付く。 | パネル「風刺画『ナポレオン像と対をなす銅像計画』」の提示<br>七月王政の政治的意図を超えて，ナポレオンの記憶は社会に不満を持つ民衆を刺激してボナパルティズムの激昂を招き，七月王政を崩壊させる原動力となったことに留意する。 |
| | ルイ・ナポレオンが著した『ナポレオン的観念』を読み，ナポレオン１世とその時代を，どのように評しているかを知り，その政治的意図について考える。 | プリント「ルイ・ナポレン著『ナポレオン的観念』」の配布<br>ルイ・ナポレオンが，ナポレオン戦争の惨禍を隠蔽し，ナポレオン１世を「自由と平等の擁護者」「社会改革の実現者」と位置付けていることに注目させる。 |
| | 二月革命後，第二共和政下で実施された大統領選挙に出馬したルイ・ナポレオンの選挙用ポスターを見て，ナポレオン１世と自らを同一視させようとする意図に気付く。 | パネル「ルイ・ナポレオンの選挙ポスター」の提示 |
| | クーデタによって即位したナポレオン３世が開始した第二帝政下で，ヴァンドーム広場の記念柱がどのように変容したかを知る。 | 再びローマ皇帝姿に戻ったナポレオン像の意味が読み取れるよう配慮する。 |
| | 第二帝政に反対するユゴーが，亡命先で著した詩を読んで，ナポレオンの記憶に熱狂する民衆に対して警鐘を鳴らしたことを知り，歴史的記憶の政治的利用について考える。 | プリント「ユゴー作『贖罪』」の配布<br>ユゴーのナポレオンに対する評価が再び「英雄」から「独裁者」へと変化したことに注目させ，社会状況の変化を反映して，歴史的記憶もまた書き換えられるものであることが分かるよう配慮する。 |
| | フランス＝プロイセン戦争の敗北，第二帝政の崩壊によって，ヴァンドーム広場の記念柱が，どのような運命を辿ったかを知る。 | 写真パネル「ヴァンドーム広場の記念柱の倒壊」の提示 |
| | パリ・コミューンの布告を読み，記念柱が「野蛮」「暴力と虚栄」「軍国主義」を想起させたことに気付く。 | プリント「パリ・コミューン布告」の配布 |
| | 第三共和政下で，ヴァンドーム広場の記念碑が再建された意図について考える。 | 写真パネル「再建されたヴァンドーム広場の記念柱」の提示 |
| | バレスが著した『根こぎにされた人びと』を読み，ナポレオンの再評価が，どのような背景の下に行われたかを読み取る。 | プリント「バレス著『根こぎにされた人びと』」の配布<br>ナポレオンが新たに対独復讐のシンボルとしての役割を担ったことに留意する。 |
| | やがてフランスが第一次世界大戦へと突き進み，145万人に上る戦死者を出したことを知り，ナポレオンの「栄光」の記憶が果たした役割について話し合う。 | |

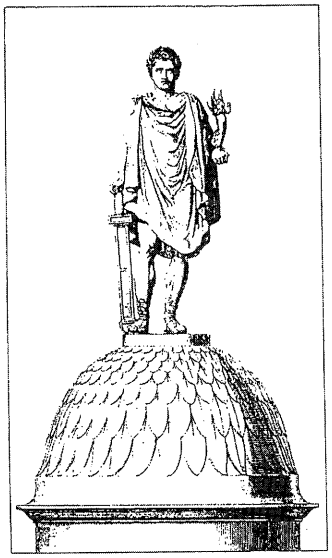

図１　第一帝政期の記念柱上のナポレオン像のデッサン

図２　風刺画「人類をむさぼり喰らう鬼」

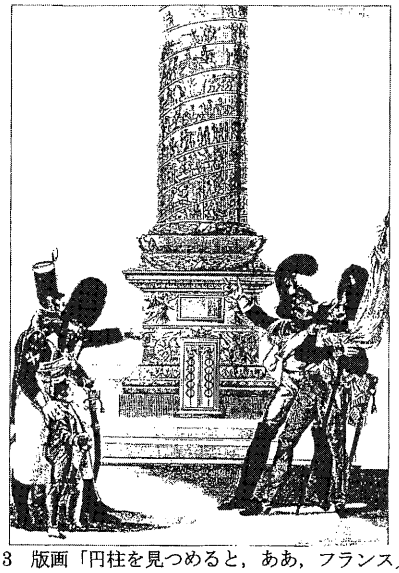

図３　版画「円柱を見つめると，ああ，フランス人であることが，なんと誇らしく思えることか」

図４　七月王政下で復活したナポレオン像

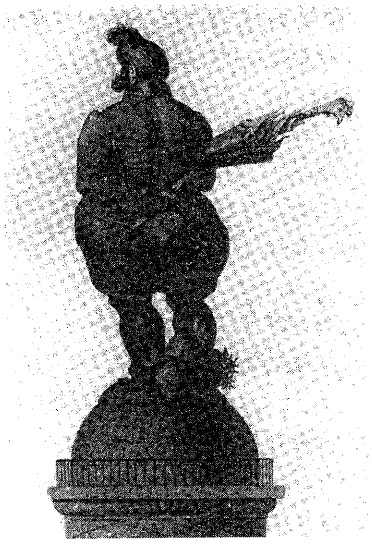

図５　風刺画「ナポレオン像と対をなす銅像計画」

図６　ルイ・ナポレオンの選挙用ポスター

図７　パリ・コミューンに引き倒された記念柱

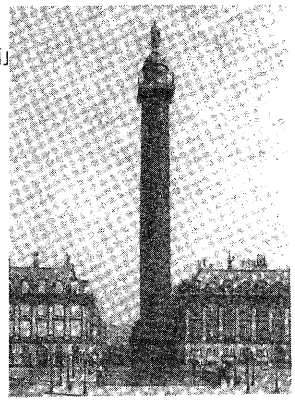

図８　第三共和政によって再建された記念柱